
クワガ・スタッグ!

サドル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クワガ・スタッグ！

【Nコード】

N5511Z

【作者名】

サドル

【あらすじ】

2013年8月、日本
数百年に一度、土地に溜まった霊力が解放される？祭？と呼ばれる月

霊力を使い、人々のイメージと素体となる甲虫を元に顕現した5人の鍬神と、それに乗じて不完全な肉体を得たイレギュラー雑蟲たちそしてそれに不本意ながら巻き込まれてしまった高校生、辻^{ツジ}行雲^{イクモ}は、どういわけか大鍬の神、柵^{クヌキ}と同居することに！

5人の鍬神と主人公の繰り広げるギャグとバトルとハーレム中心の

ファンタジーライトノベル風味（意味不明）

プロローグ 「クワガタのお姉ちゃん」

月の大きな夜だった。

まだ日の出ていた頃の体にへばりついてくるような暑さは心地よい夜風へと変わり、天蓋の海に瞬く無数の星たちが気分を清涼な物にしてくれる、そんな夏の夜。

街灯は決して多くなく人気も無い田舎の小道、そこには小さな体を震わせながら歩を進める一人の少女の姿があった。

まだ幼さの残る顔立ちやようやく起伏が現れ始めた発展途上のその身体は多く見積もって中学生、もしくは小学生高学年。

そんな少女が丁寧に梱包されたノートを両手に抱え、やたら周囲を気にしながら夜道を歩いていた。

少女が怯える理由、なんてことはない。

ただ日も暮れた後、少女は明日の授業に使うノートが切れていたことに気付き、近くのデパートまでノートを買に行つてその帰宅途中、何かの拍子で今朝見たニュースで取り上げられていた通り魔事件の事を思い出してしまい必要以上に敏感になっているという、ただそれだけの話

いや、ただそれだけの話？ だった？

少なくとも数分前、もっと正確に言えば少女が？ ソレ？ を見つめるまでは

「……？」

唐突に、少女はある一点だけを見据え歩みを止めた。

少女の視線の先、そこにはなにやら暗闇の中で蠢く何かの影が。

「…………！」

少女は小さな胸に買ったばかりのノートを抱きしめ、得体の知れない恐怖からくる震えを抑える。

まさかそんなはずはない、そう、アレは多分ここらへんに住んでる野良猫か何かだろう、気にする必要はない。

必死で自分に言い聞かせ、やっとの思いで少女は再び歩み出す。

しかし、自分の予想はどれも間違っていた、それに気付いたのは少女がその影との距離を数メートルを切った頃。

ぼとん

丁度影のいる辺り、まるで湿ったボロ雑巾のような何かが落ちる鈍い音が少女の耳に届く。

勿論恐怖心はあった、しかしその反面膨れ上がるのは余計な好奇心。

少女はその影の背後を通るその瞬間、好奇心に負け、音のした方向へ振り向き　そして後悔した。

「え　？」

少女の腕の中からノートが滑り落ち、アスファルトの上を跳ねる。

猫。

ボロボロに、グズグズに腐敗して、酷い腐臭を放つ猫の姿がそこにあつた。

「　　っ!？」

少女の声にならない叫びが辺りに響き渡る。
それがいけなかった。

何故ならそれは？彼ら？に自らの存在を知らせてしまったのだから

「ジ……ジジッ……ジ」

先程の声で少女の存在に気付いたのか、形容し難い音を立てながら影はこちらに振り向く。

少女は目を疑った。

何故ならソレは人ではなかったから。

ソレはまるで無数の小さな粒が集まり無理矢理人の形を成しているかのような 異形の怪物だったから。

「ひっ……！」

逃げなくては ！

本能がそう警告し、少女は不気味に蠢く異形の怪物を視界に捉えながら二、三步後ずさる。

しかしそれ以上足が動かない、動いてくれない。

恐怖という名の鎖が少女の足を、腕を、口を、全身を縛り上げ、動くことを許さないのだ。

「ジジ……ジジジジ……」

恐怖に顔を歪め硬直する少女の顔に怪物の手が、否、手の形をした物が迫る。

ざわざわと蠢きながら眼前に迫るその手は少女の恐怖心を加速させ、少女の目には涙が滲み出す。

もうその動きが空気を通じて伝わってくるほど近くにソレがある。先程の猫の死骸の映像が頭の中を何度もフラッシュバックし、まるで脳を焼き切るようだ。

恐らく自分もあなる。特に抵抗もできないまま、特に何もできないまま。

だから最期、最期に無意味で無駄で、そしてささやかな抵抗を

「誰か」

助けて。

少女がその一言を言い終える事はできなかった。

理由は、言う必要が無くなったから。

もっと言うならば目の前の異形の怪物は、現れたもう一つの影によつて殴り飛ばされたからだ。

「ジジッ」

顔の辺りを渾身の力で殴られた異形の怪物が体の一部を散らしながら地面を転がる。

不意打ちだったこともあるのだろう、怪物はそのまま勢いよく壁に叩き付けられ派手な音を立ててようやく勢いを殺した。

「え………？」

少女は未だに何が起きたのか分からないと言った様子できよとんと目を丸くする。

そして少女はしばらくしてからはつと我に返り、視線を地面に這いつくばる怪物からもう一方の影に移した。

もう一つの影の正体、それは紛れもなくただの人間。

暗がりによく見えないが体格と乱雑に切り揃えた黒髪から察する

に間違いなく男性だ。

身長は175？前後、歳は……高校生くらいだろうか。
何処からどう見ても一般的な、平凡な、ただの、人間。

「女の子が助けを呼ぶなんてシチュ、こんな雑虫程度に使うのは勿体無さすぎる、今後のために大事に取っつけ」

青年はおおよそこの状況にはそぐわない余裕に満ちた表情で冗談っぽく言う。

一見、男性に鍛えていると言った様子はない、ではこの自信の根拠は一体……？

安堵よりも先にそんな事を考える少女の訝しげな表情を読み取ったのだろう、青年はこう切り出した。

「ん、ああ、期待しないよう言うておくけど別に俺は強くもなんともないぞ、普通の人間

さっきのは油断してたから偶然決まっただけで……マトモにやり合ったら多分確実に負ける」

青年はそんな重大な事を危機感皆無と言った様子で少女にさらりと告げる。

見ると先程青年に殴り飛ばされた異形の怪物はもうすでにダメージを回復し終えたらしい、非生物じみた不気味な動きで今にも立ち上がろうとしていた。

「そして案の定さっきのでは倒せてない……と、やっぱり成り損ないといええ神様だな」

青年はぶつぶつと何かを呟いている、が、この際問題ではない。

少女の顔には再び焦燥と恐怖の色が浮かび上がる。

「ど……どっするの……？」

そんな状況に耐えかねたのか、少女の口について思わず言葉が出てしまう。

視線の先ではすでに怪物が体勢を立て直し、こちらへ狙いを定めていた。

にも関わらず青年は構えを解き、そして一言。

「なあに心配するな、そういうのは全部アイツの仕事だからな」

アイツ？

少女がそう聞き返そうとしたのと、ほぼ同時にそれは起こった。

「よくやったぞ行雲、後は任せろ」

どこからともなく聞こえてきた良く通る女性の声。

直後、異形の怪物の上半身が何の前触れもなく消し飛んだ。

「え……！？」

ざわざわと音を立てて霧散していく怪物の上半身。

少女は驚愕の声をあげて辺りを見回す、すると案外ソレは早くに見つかった。

ここから少し離れた樹の枝の上　そこに彼女はいたのだ。

黒を基調とした鎧、艶のある腰まで伸びた黒髪、そして女性の右手に握られているのは少女の細腕には見合わぬ身の丈ほどの黒く輝く巨大な大剣。

頭从天辺から足の先まで、全てが黒、黒づくめ。

しかし彼女はこの夜の闇の中、まるで彼女の周りだけ空間を切り

取ったかのように？浮いていた？

「…………随分遅かったな」

行雲、そう呼ばれた青年が樹の上からこちらを見下ろす女性に皮肉を込めて吐き出す。

「すまんな行雲、丁度出発しようと思ったら電話がかかってきてな、丁寧に小一時間ほど応対していたら予想以上に時間を食ってしまった、なんでも菅原さんという人物に用があつたらしい」

「間違い電話じゃねーか！　っていつか人の家の電話勝手に出んな！」

青年が声を荒げて木の上に立つ黒づくめの女性にツッコミを入れる。

しかしそれでも黒づくめの女性は毅然な態度を崩さぬまま青年に問いかけた。

「それより、あの雑蟲の素体は何だ？」

女性の鋭い目つきが青年から雑蟲と呼ばれた異形の怪物へと向けられる。

怪物は上半身が吹き飛ばされたというのに、未だ活動を停止してはいなかった。

残った半身がざわざわと蠢き、下半身だけで活動を再開する。

「…………見ての通りだ、どうも一個体じゃないらしい、知名度も素体自身の力も最下級

殴った時の感触が手応えなさ過ぎた、加えてあの羽音は…………恐ら

くシヨウジヨウバエか何かの類だろう」

「これはまた面倒な……まあそれさえ分かれば十分だ」

黒づくめの女性が手に持った背の丈ほどの巨大な剣を構え、未だ蠢く怪物の下半身を鋭い目つきで捉える。

「人間の少女よ、覚えておくがいい」

黒づくめの女性の構えた剣が輝きを失う。

それと同時に道路端に申し訳程度に設置された街灯がジリジリと音を立てて激しく点滅を始めた。

「我が名は大鍬の神、分かりにくければ」

そして黒づくめの女性は今にも折れそうな細い木の枝をバネのようにならせ　　一声。

「クワガタのお姉ちゃんと呼ぶがいい！」

その日、その瞬間。

時間にすればほんの数秒だったが、町中のあらゆる明かりが、消えた。

第一話「何か甘いものを」

2013年7月31日、この俺、？^{ツジ} 行雲^{イクモ}？にとっては高校生
活二度目となる夏休みの前日。

夏休み この単語が素直に喜ばなくなったのは何時からだっ
たらう。

何故か、そんなのは決まっている。

まずはこの問答無用の暑さ、説明不要、鬱陶しいったらありや
ない。

こんな猛暑日におおよそ人語とは思えない奇声を上げながら走り
回っている小学生を見ると本当に同じ生き物なのか心配になってく
る。

次に物理的にも精神的にも俺を圧迫してくる鞆の中の山のような
課題。

解答用紙を丸写しするのは確定としても……やはり多すぎる。

これでもし自由研究があつたなら俺は夏休みを使って国外逃亡す
るつもりだ。

まあ他にも理由は色々あるが、以上、俺が夏休みを嫌う理由
いや、少し語弊があつた、別に夏休みが嫌いと言う訳ではない、
ただ夏休みという単語を聞いて一言で言い表せないような微妙な表
情をってしまうだけだ。

……まあそれでも休みというのは嬉しい限りである。今年の夏は
未だにお互いを名前呼びをしているウチのバカップルが20回目の
新婚旅行でオーストラリアへ向かい不在なのでやりたい放題だしな
だが夏休み明けのテストが強敵だ、そこで赤点を取ってしまったば
二期期はそのハンデを引きづりながら過ごす事となり、二期期の学
期末テストで苦戦を強いられることは必死だ。

もし落ちてしまえば冬休みに暖房のない化学実験室で補習、何の

冗談だ、それだけは御免こうむりたい。

となれば多少は勉強もしないとマズイだろう。

「国語と英語は勉強しなくても赤点回避できるくらいの点数が取れるから良し……世界史と地理は始業式の一週間前から暗記を始めればなんとかなる。数学は……嫌だ」

そんな事を一人ぶつぶつと呟きながら帰路に行く。

そして、まあどうせこんな計画家に帰って風呂にでも入れれば忘れてるんだろうけどな、などと悟った頃だっただろうか。

俺はアスファルトの道路の一点を眺め、ぴたりと動きを止めた。

「ん……？」

視線の先、そこには道路のど真ん中で光沢を帯びた黒い腹部で天を仰ぎ、じたばたと6つの脚を動かす甲虫 俗に言うクワガタがいた。

「……近くの雑木林から来たみたいだな」

俺は手に提げた鞆を一旦地べたの上に置き、腰を屈める。

仰向けになつたまま起き上がれずじたばたともかくクワガタ、見るとかなり体力を消耗しているようでどこことなく動きが弱々しい。

「……」

俺はしばらくそれを無言で見つめていると、おもむろに人差し指を差し出してばたばたと脚で空を切るクワガタをしがみつかせた。

「はぁ……何やってんだろ……」

深く溜息を吐き出し、指にしがみついたクワガタを落とさないようその場から立ち上がってゆっくりと歩み出す。

そして俺はそのまま近くにある茂みの前で立ち止まり、そこにクワガタを放してやった。

「……ま、夏休み前で浮かれてた、ってことにしておこう」

そう自己完結し、のそのそと土の上を這って歩くクワガタを背にして再び帰路へ戻ろうと踵を返す。

その時だった。

ガサツ

「ん？」

丁度初めの一步を踏み出そうと足を上げた時、まるで俺を呼び止めるかのように背後の茂みからなにやら物音が耳に届く。

大方野良猫か小鳥の類だろうと分かっただけはいるものの、やはり人間と言うものは半ば反射的に振り向いてしまう。

この時振り向いたのが、俺にとっては幸だったのか、それとも不幸だったのか。

振り向くという選択肢を選んできました今となってはもう分からない。

ただ、これだけは確かだった。

俺の視線の先、そこに黒い甲冑で身を包んだ美少女が仰向けになって目を回しながら倒れていたことだけは

「……ええ」

思わず口をついてそんな声が出てしまう。

仕方ないだろ、帰り道で黒い甲冑を身に纏った女性が倒れていた時の対処法なんて義務教育では習わなかったんだから。

……と、そんな冗談を言っている場合ではない！

「おい！ 大丈夫か！？」

俺は咄嗟に手に持った鞆やらなんやらを投げ出し、茂みをかき分けて地面に倒れる少女の元へと駆け寄る。

外傷は……特に無いが体温が上昇している。発汗は少ない……典型的な熱中症の症状だ。

「良かった……、これなら大丈夫だ」

これならば少し涼しいところにも運んでやってちゃんと水分補給さえさせれば大事には至らないだろう。

俺はほっと胸を撫で下ろし安堵の溜息を一つ吐き出す。その時だった。

「う……」

鎧の少女が小さくうめき声をあげる。

「お……、おい、大丈夫か」

少しばかり呼びかけるのに躊躇してしまっ。

その理由は多々あるが、あえて一つ挙げるとするならば……その少女が予想外に可愛かった事だ。

乱れ一つない腰まで伸びた艶のある黒髪、整った端正な顔立ち、鎧越しでも分かる引き締まった身体。

どこか神聖な雰囲気を感じさせるそれはまるで作り物のようで

「……もの……」

「え？」

少女の唇が微かに動く。

何かを呟いているようだが聞き逃してしまった。

なので俺は全神経をその少女の言葉に集中させ、耳を傾けて……

「何か……甘いものを……」

ばかり。

それだけを言い残して少女は気を失う。

これが、鎧の少女と俺、辻行雲の最初の出会いだった。

第二話「何だコイツ」

ここは辻邸、すなわち自宅一階のリビング。

あるものといえば他の家より少し大きめのテレビとアンティークな横長のソファが二つ、あとはカレンダーとか時計とか電話とか…まゝ要するに普通の居間。

クーラーから吐き出される心地の良い涼風が部屋の中を満たし、外の世界とは隔離された楽園を創り出す。

そしていつもソファの上でイチャついてるウチのバカツプルの不在につき一層理想郷へと近づいたその部屋の中心、そこに彼女はいた。

「すう………」

黒く重厚な鎧を身に纏ったまま、リビングの中心を陣取るソファの上で心地よさそうに寝息を立てる黒髪の少女。

そう、あの後俺はあのまま放っておくという訳にもいかず、結局自分の家まで少女を連れ込んでしまったのだ。

「どうしたもんか………」

カーペットの上で胡坐をかき、水の入ったコップを片手にした俺は溜息交じりに一言漏らす。

勢いで自分の家まで連れてきてしまったが……よくよく考えたら行き倒れの女の子を自分の家に連れ込むって結構危険じゃね？ などと今更ながら後悔の念も覚え始める。

それにこの少女……見るからに面倒事の匂いがするのだ。

特に少女の身に纏う鎧……。

初めはただのレイヤーか何かだと思っていたのだが、どうやらレプリカの類でも無いらしい、ここまでコイツをおぶって来た俺が言うのだから間違いない。

顔立ちは何処からどう見ても日本人だが……今の平成の世で鎧姿？ どれだけ流行に乗り遅れたらこうなるのだ。

「……ま、細かいことは後で直接本人に聞くか」

ソファの上で未だ寝息をたてている少女を一瞥し、コップに注がれた水道水を飲み干す。

介抱してやった甲斐もあってか少女の容態は初め会った時に比べ大分安定していた。

その内自ずと気が付くはずだ。

「俺も大概だな……」

ふう、本日何度目になるであろう溜息を吐き出し、物思いにふける。

俺にはこの少女を放っておくという選択肢も十分あったはずなのに、俺は迷わずこいつを助けるといふ道を選んでしまった。

……自分でも損な性格だというのは分かっているつもりだ、でも多分これは死ぬまで直らない。

どうしてこんな性格になってしまったのか、確か何か理由があったはずだが……

「……」

……っと、そうこうしている内にようやく鎧の少女もお目覚めのようだ。

「お、やっと起きたか」

「……………」

少女は俺の声など聞こえていないと言った様子で薄く目を開き、訝しげな表情で天井の一点を見つめる。

そしてしばらくそうしていたかと思うと、少女は唐突にソファから跳ね起き、辺りの様子を見回し始めた。

上下左右、何度も自分の置かれた状況を確認するように視点を動かし、そして最後にその視線が行きついたのは少女の足元でカーペットの上に胡坐をかく俺。

すると黒い鎧を身に纏った少女はソファの上から上半身だけを起こした体勢で、その吸い込まれそうな二つの黒い瞳の中に俺の姿を映したまま、固まってしまった。

「えーと……………大丈夫か」

さすがにちよつと心配になってきたので、少女にそう問いかけてみる。

すると少女はそれでようやく我に返ったらしく、何故か殺意を込めた目で

「貴様……………！」

「え？」

直後 俺が理解するよりも早く、ソレは起きた。

少女は先程まで寝込んでいたとは思えないほどの俊敏な動きでソファから飛び降り、こちらに向きを転換。

そして間髪入れずに、少女は肘から腕をすっぽりと覆った籠手で

俺を突き飛ばし、そのままカーペットの上に押し倒したのだ。

「なっ……!?!?」

「動くな人間、少しでも動けば喉を潰すぞ」

一瞬の事で頭の中が真っ白になる俺に対し、少女はそうささやく。まさか本当にそんなことするわけがない、そう頭の中で自分に言い聞かせてみるが、首に伝わってくる籠手の冷たく金属質な感触と彼女の迷いのない語気はそれが真実であるという事を告げていた。

なんとか少女を跳ね除けようとするも、それすら叶わない。

甲冑に覆われた彼女の細腕は、どれだけ俺が力を込めようとビクともしないのだ。

「……ふむ、しかしまさか人間に見つかってしまつとは……私らしからぬ失態だ」

少女は俺が抵抗しなくなったこと、否、抵抗しても何もできないことを確認すると、そのまま誰に言う訳でもなくぶつぶつと訳の分からない独り言を呟きはじめた。

「この人間一人生かしておいたところで別段何の損もないが……人に話され騒ぎにでもなつたら私が動きにくくなる。人間を殺すのは初めてだが……仕方ない」

何か物騒な事を呟いていたかと思うと少女はこちらへ向き直り、その射抜くような双眸で俺の顔を見つめる。

そして少女は俺を抑えている方とは逆の手を振り上げ、貫手の構えを取った。

……えーと、今の話の流れからしてもしかすると俺、見も知らぬ

鎧の少女に訳も分からないまま……殺される？

「多少私怨も混ざってはいるが……まあそういうことだ、悪く思っ
なよ人間」

少女の目つきが一層鋭くなり振り上げた手に力がこもる。

狙いは喉、と言ったところだろうか。

成る程、あの少女の圧倒的な腕力で、あの甲冑に包まれた腕に突
かれればひとたまりもない。

が、当然こちらとて自分が殺されると分かっているが、黙っているは
ずが ない！

「悪く思っわこの電波女がああああ！」

俺は押し倒された体制のまま両膝をたたみ、そして渾身の力を込
めバネのように縮めた足を突き出す。

突き出された足は少女の胴体にクリーンヒット。

「ぐっ……！？」

咄嗟に働いた火事場の馬鹿力。

それは完全に油断しきっていた鎧の少女の体を少しながら浮かし、
それによって少女はバランスを崩す。

勿論、それに伴って少女の手に込めた力も若干緩み、俺はその隙
に少女の拘束から抜け出して部屋の端まで移動、少女との距離を取
った。

「小賢しい真似を……！」

どうやら少女も体勢を整え直したようで、鷹のように鋭い二つの

眼が再びこちらへ向けられる。

「いいだろう……無抵抗の者を殺すというのは多少なりとも罪悪感がある……ならば」

鎧を纏った少女はそう言うと、何を思ったのかその場で上半身を屈め掌を床につく。

するとどういいうわけか何の変哲もないはずの家の床が光り出し、そして少女が掌を上にあげる動作に合わせ、床から少女の身の丈ほどもある黒く巨大な鉄塊　いや、巨大な一本の大剣が現れた。

「私の？黒金剛？で跡形もなく消し飛ばしてくれろ！」

その刀身を完全に露わにし宙に浮かぶ黒い剣。

少女はその剣の柄を手に取り、そしてその数百キロは下らないだろうと言ったその剣を、あるうことかその細腕で軽々と構えたのだ。

「ま、マジかよっ!？」

勿論俺も驚きを隠せない。

しかし、そんなのはお構いなしと言った様子で鎧の少女は大きく踏み込む。

まるで剣など持っていないかのような俊敏な動き、少女はそのまま俺の懐まで潜り込んで

「貰った！」

「しまっ　！」

少女が大きく剣を振るう。

下段からの切り上げ、避けることは……できない。
そう悟った瞬間、世界がまるでスロー再生のようにゆっくりと動き出す。

黒く鈍い輝きを放つ大剣は、俺の顔めがけてゆっくりと迫り、空気をかき回し、空間に光の軌跡を描いて

ぐう

「え？」

ゆっくりと動く世界に響き渡るところか間抜けな音。

その直後、少女の手に持った剣は少女の手をすっぽ抜けてどこかへ飛んでいく。

後方から鳴り響くすさまじい破壊音、全身の血の気がさーっと引くを感じるも振り返ることはできなかった。

何故なら、手に持った大剣を失った鎧の少女はそのまま力なく前のめりに倒れ、俺に覆いかぶさるように

「いだっ!?!」

鎧の少女と壁にサンドイッチにされ、後頭部に鈍い痛みが走ると同時に世界は元の早さを取り戻す。

そりゃああの剣の一撃を喰らうよりは遥かにマシだろうが……一体何故？

そう思い、俺は俺の体によりかかったまま何も言おうとしない少女に視線を落とす。

すると少女は目を回しながら、一言。

「……なにか……甘いものを……」

……何だコイツ。

第三話「我、大鍬の神なり」

「よし、できた」

厨房に立つた俺はガスコンロの青白い炎をツマミを捻ることで消し、それに合わせてフライ返しを動かす手を止める。

じゅーじゅーと音を立て、香ばしく甘い匂いを発するソレ。

普段インスタントものばかりで済ませている俺が唯一得意とする料理、フレンチトーストだ。

……まあ、食パンを砂糖と卵と牛乳、それにバニラエッセンスとラム酒を少々加えた物に浸してフライパンで焼くだけという料理と言っただけでいいから怪しいものだが、それでも料理には違いないだろう。

「8枚切りを4つに分けたから……32か、これだけあれば足りるだろ」

フライパン片手に居間へ向かい、テーブル上の大きめの皿に積み重なったフレンチトーストの山に、出来たてのフレンチトーストを追加する。

これで準備は整った、あとは……

「ほら、ご所望の甘いもんだぞ」

そう言っただけで俺は鎧の少女に文字通り山盛りの皿を差し出した。

テーブルに力なく寄りかかり顔から上だけをテーブルの上に乗せる鎧の少女は、見ようによってはテーブルの上に乗った生首にも見える。

「だ……誰が人間の作ったものなど……」

生首が青い顔で鎧越しに自らの腹部を押さえ強がる、が

「……その割にはすごい見るのな」

「ぐっ……」

少女が悔しそうに目を逸らす、しかし横目でチラチラ見ているのがバレバレだ。

「ふふ……き、汚い人間の事だ、どうせその食物にも毒か何かの類を仕込んでいるのだろう……？」

「アホか、そんな手の込んだ事するくらいだったらあのまま餓死させるわ」

「ぐ……しかしそんな得体の知れぬものを私が……」

「……得体の知れぬもの？　なんだ、フレンチトーストを知らないのか、じゃあ……」

そう言っただけ俺はフレンチトーストの山に手を伸ばし、まだ白い蒸気をたちのぼらせるソレを一切れ手に取る。

そして鎧の少女がその様子をじっと見つめる前で、俺はそれ自らの口の中へ放り込んだ。

外はさくつと、中はしっとり。

ありきたりな表現だが、それゆえに至高。

口の中にほんのりと広がる控えめな甘さに少しだけ残るバニラエ

ツセンスとラム酒の風味……我ながらいい出来だ。

「うん、なかなか」

「ごくり、俺の一挙一動を穴が開くほど見つめていた鎧の少女が唾を呑む。

そろそろ頃合いか

俺はそれから更にもう一枚フレンチトーストを手に取り、それを少女の前に差し出した。

「ほら、これでも納得できないんだったら取引だ」

「取引……？」

訝しげな表情で俺の言葉を反復する少女に対し、続ける。

「そう、お前の払う対価は……そうだな、この行雲製フレンチトーストをやる代わりに、俺の質問に答えてもらう、これでいいか？」

「ふふふ、なるほど卑劣な人間らしい……」

……そんな嬉しそうに言われても

「本来ならば人間の食物など願い下げだが、こちらも死活問題なのでな……いいだろう、その取引、乗ってやる」

……色々と面倒臭いヤツだ。

「が、取引については承諾してもらえたので、まあ結果オーライと言ったところか。」

「よし、じゃあまず一つ」

手に持った一切れのフレンチトーストを生首、もとい鎧の少女に差し出す。

すると少女はそれを手で受け取るでもなく、口を大きく開けて……

「あーん」

マジか……

「……別にいいけどさ」

あれだけ言っておきながら存外不用心な鎧の少女の行動に多少の戸惑いを覚えつつも、何故か恥ずかしがったら負けのような気がしたので、そのまま少女の口の中にフレンチトーストを放り込む。

それを確認すると少女は口を閉じて咀嚼、同時に目も閉じて口の中のソレを丹念に味わうようにして……

瞬間、まるで電撃が走ったかのように少女はカッと目を見開き、そして声にならない叫びをあげた。

「ツツツツ!?!」

「なんぞ!?!」

少女の急激な変化に不覚にもびびってしまふ。

しかしそんな俺すら視界に入っていないようで、少女は思い出したように無我夢中で咀嚼を再開した。

「あ、甘い! 甘くて美味い!! なんだこれは!?!」

「い……いや……フレンチトーストですが……」

正直そこまで喜ばれると照れるを通り越して引いてしまう。
確かに両親にせがまれてよく作ったりしてはいたが……さすがに
この喜び方はオーバーすぎやしないか？

例えるならまるで初めて人間の食べ物を食べたような……。

「……さすがにそれはないか」

頭に浮かんだ妄想を掻き消し、少女に向き直る。

見ると少女はようやく口の中の物を飲み込んだらしく、満足げな
表情で脱力していた。

「う、うむ……なかなかだったぞ……」

いや、どう見てもなかなか感じては無かったぞ。

これでなかなかなら本当に美味しいものを食べた時は幽体離脱し
てしまうのではないだろうか。

……と、まあそんなことは今どうでもいい、とりあえず取引だ。

「じゃあ早速一つ目の質問、お前は何者だ？」

今日、平成の世で鎧姿の謎の少女、その正体。

それが俺の一番聞きたかったこと、もっと言えば唯一俺が少女に
聞きたかったこと。

しかし当の少女はその質問を聴くと何故かぽかんと口を開け、そ
のまま固まってしまった。

「人間……まさか貴様私の正体を知らずに私を攫ってきたのか……
？」

と、思っていたら何故か俺の質問をとんでもなく失礼な質問で返されてしまった。

「だ……誰が攫うか！ お前が道で倒れてたもんだから俺がここま
で運んでやつ……」

言いかけて、しまったと口をつぐむ。

俺自身あまり人に恩を売ることが好きでないのだが、ついはずみ
で喋ってしまった。

無論あそこまで喋ってしまえば目の前の鎧の少女にも俺の言わん
としていたことは理解できてしまうわけで……

「なっ……！ それは本当か……！？」

少女はテーブルから乗り出し、再度質問を投げかける。

いつの間にか立場が逆転していることは置いておいて……「こうな
ったらもう駄目だ。

ここで違つと言えば誘拐犯だし、無言なら肯定と見られる。とな
ると俺に残された選択肢は……

「……まあ、はい」

結局、少し言い淀んだが俺は肯定の意を示してしまう。

「そんな……いや、まさか人間が……そんなはずが……」

一方、それを聞いた鎧の少女は、なにやらひどく難しい顔で独り
言を呟っていた。

そしてしばらくその状態でぶつぶつと呟いていると、何を思った

のか突然椅子の上で立ち上がり、腕を組み仁王立ちをして　一声

「た、倒れていたことは認めるが人間に助けられた事は認めんッ！」

「はぁ！？」

いきなり何を言い出すんだコイツは！？

「さっ、さすがにそれは無理があるだろ！」

「黙れ人間！　それ以上言つと斬るぞ！　そんなことより……取引
！　取引だ！　私の事が知りたいのだろう！？」

こいつ……自分から話を脱線させておいて強引に引き戻しやがった、無茶苦茶である。

そう俺が口に出す暇も与えず、鎧の少女は俺を見下ろして高らかに宣言した。

「私の名は大鍬の神！　此度の祭による霊力の解放で霊力を元にこの地に顕現した鍬神だ！　もう一度言う！　我、大鍬の神なり
！！！」

してやつたり、まさにそんな表現の似合う顔でこちらを見下ろす
自称神様。

一方俺はというと

「いやぁ……最近暑い日が続いたからなあ……」

呆れと憐みを足して二で割ったような口調で一言呟き、フレンチトーストを一口齧る。

「な!？ 何故疑る！ この鎧と私の剣？ 黒金剛？ がそのなにより
の」

「……俺の家の壁に突き刺さってるアレのことか？」

少し呆れた風に言い、居間の方を指さす。

そこにあつたのは居間の壁をめちゃくちゃに破壊した上で壁から
突き出る巨大な黒い鉄塊。

つい数分前、空腹で倒れた鎧の少女の手から思いつきりすっぱ抜
けていったアレだ。

「まあさっきの事もあるから百歩譲って神様だと認めてやるとして
……空腹で倒れて熱中症で倒れる神様？ さすがに……」

「ぐ……!?!」

やはりそこは凶星だったようで鎧の少女がたじろぐ。

「しかも名前を聞いても何をする神様がさっぱり分からないからど
れだけ偉いのか分からないし……命の恩人に斬りかかって人の家の
食物食べていく神様？」

「んぐぐぐ……っ!」

よほど悔しいらしく、鎧の少女は両拳を握りしめて顔を真っ赤に
する。

そのまま沸騰してしまうのではないだろうか、そんな事を考え始
めた頃、鎧の少女は鋭い眼光でこちらを睨みつけ、絞り出すような
声で言った。

「……そこまで言うなら……いいだろう人間！」

鎧の少女が片足をだん、とテーブルの上に片足を叩き付け、こちらをびしっと指で指す。

「表へ出るがいい！ 私が神である証拠、見せてくれる！」

第四話「しかとその目に焼き付けるがいい」

茜色に染まった空。

昼間の殺人的な暑さも若干和らぎ、ヒグラシたちの合唱に混じって非常に過ごしやすい空気が辺りを漂う時間、すなわち夕暮れ時。いつも通りならば俺は今頃早めの入浴タイムでその日の汗と疲れとその他諸々を一切合財洗い流し、風呂上りに火照った体でキンキンに冷えたサイダーを賞味しているのだろうが……今日だけは勝手が違った。

ここは自宅から歩いて数秒といったところにある広大な空き地。

数年前、この場所にはそこそこ大きなゲームセンターがあった、だが老朽化が原因で取り壊され、残った土地は手入れもロクにされておらず今やただの荒地と化し、主に近所の子供たちの遊び場となっている。

その中心で俺は腕に止まった蚊を指で弾き、涼しくなってきたからか蚊が多いなあ、などと考えながら真正面で仁王立ちを決め込む自称神様の少女を見据えた。

容姿端麗で鎧姿の少女……もし通りかかった人にでも見られたらあらぬ誤解を生みそうだ。

まあここは田舎だし、近くに民家もない、大丈夫だとは思うが……やはり心配な物は心配である、さっさと用事を済ませてしまおう。

「……で、証拠って？」

身体に纏わりついてくる縞蚊を手で払いながら相も変わらず毅然と立ち尽くす鎧の少女に問いかける。

すると少女は今にも沈もうとする夕陽を見つめたままその問いに

答えた。

「……日が沈むまで待て、奴らはほとんどが夜行性なのでな、日の明るい内には出てこんのだ」

奴ら……？ 夜行性……？

何を言っているのかはさっぱり分からない。

「時間になれば分かる事だ、今はその蚊を潰すことに専念したらどうだ？」

鎧の少女に言われ、咄嗟に自らの右腕に目を向ける。

そこにはまさかの黒い三連星が！

「うおっ！？」

驚愕の声を上げ、俺は右腕をぶんぶんと振り回す。

いくらなんでも蚊、多すぎではないか……？

と、そんな事を考え始めた時、俺はふとある異変に気付いた。

俺の体にはこれだけの蚊が纏わりついてくるにも関わらず、少女の体に蚊は近づきはすれど決して血を吸おうとはしないのだ。

虫よけスプレーなどによって避けて通っている……というわけでもないらしい。

蚊はまるで初めから鎧の少女の事を餌として見ていないようにそのまま素通りしていく。

岩や木、そういったものを避けるように、ただ通り過ぎる。

「……？」

多少疑問には思ったが、蚊の気持ちなんて考えたことも無いので

よく分からない。

そんなことより日が沈むまでもう少し時間がある、今の内に聞き
たかった事を聞いておこう。

「なあ」

そうやって鎧の少女を呼びかける。

すると鎧の少女は「何だ」と不愛想に返事を返し、こちらに視線
を向けた。

「いやさ、ちょっと聞きたいんだけどお前名前はなんて言うんだ？」

「……は？」

鎧の少女が一瞬呆気に取られたような表情を見せる。

「いやほら、名前知らないと呼んだりするとき不便だろ？」

「そういうことではない！ さっき言っただろう私の名前は大鍬の
神だ、人間に名乗る名前などそれ以外に持ち合わせてはいない」

きっぱりと断ぜられる、しかし諦めない。

「そうは言っても呼びにくいんだよなあ、それに俺目で見えている
奴を神とか言うのやだし、というか無宗教だし」

「ッ………！」

鎧の少女は何か言いたげな表情でこちらを睨みつける。

が、しばらくしてようやく観念したのか、鎧の少女はふうと一っ

大きく息を吐き出し、言った。

「……^{クヌキ} 柵だ、そう呼べ」

「柵か、俺の名前は辻行雲だ」

随分不愛想な自己紹介だったが、礼儀にのっとり俺も自己紹介を返す。

これでお互いを呼ぶには苦労しないだろう。

「……一つ腑に落ちん事がある」

「ん？」

今度は鎧の少女、もとい柵が真剣な表情で口を開く。

「初め私を助けたのもそうだが……何故私は一度貴様を殺そうとしたにも関わらずそれでも助けた？ ……そして貴様は何故そこまでして私に歩み寄ろうとする？」

「……なんだ、そんな事か。」

「すぐく真面目な顔をしてたからどんなことを聞かれるのかと身構えてしまった。」

俺は素直に答えてやる。

「でも今は俺の事を殺そうとしてないだろ？ それで十分じゃないか、こつちが一步二歩譲ってそれで解決するなら安いもんだ」

「……」

それを聞いて柗は一瞬だけ眉を顰めるが、間もなく押し黙ってしまふ。

そしてそのまま何も言わずに俺から視線を逸らし、もう半分以上が山の向こうに隠れた夕陽に向き直った。

「……時間だ、そろそろ来るぞ」

柗はそう言って身構える。

何が？ そう尋ねる余裕もなく、ある変化が起き始めた。

日が沈み辺りに闇が落ちていくにつれ、あれだけ俺の周りを飛んでいた大量の蚊が次々と体を離れ、空中の一点に集まり始めたのだ。

「……？」

良く見ると俺の体に纏わりついていたものだけではない。

どこからともなく現れた縞蚊たちはまるで見えない何かを引き寄せられるように集まりだし、空中に黒く蠢く不気味な塊が形成されていく。

異様、それ以外の言葉では表せない目を疑う光景だった。

空中に形成された塊は時間が経つにつれ徐々に大きくなり、ついにはバスケットボール大にまで肥大、しかしまだ止まらない。

塊は形を変え、さらに肥大化し……

「ふむ、今回の雑蟲は縞蚊が素体か……これではリハビリにもならん」

柗が呟き。完全に日が落ちる。

それと同時にその奇妙な塊は激しく胎動を始め、なんと人の形を成したのだ。

「なっ……！？」

その姿は、とても形容しがたいものだった。

シルエツトだけ見れば人のソレ、しかし実際は人間と遠くかけ離れた異形の怪物。

体を形成する無数の縞蚊は怪物が動く度にざわざわと蠢き、縞蚊たちの重なり合った羽音は悍ましい鳴き声のようだ。

動きもぎこちなく、潤滑油の切れた機械仕掛けの人形を連想させる。

しかしなによりも恐怖を感じたのが、徐々に怪物の動きが人間に近づいている事だった。

「怖気づいたか人間」

当たり前だろ、むしろお前がなんで怖気づいてないのかが不思議なくらいだ。

「私は祭りの度に何度も見ているからな、もう慣れた」

祭……？ そう言えば少し前もそんな事を言ってた気が……

「祭とはその地に蓄積した霊力が解放されるひと月の事、その際解放された霊力が肉となり、骨組みとなる素体に肉付けをしたものが私たち、鍬神となるのだが……」

この際、同時に別のモノも顕現してしまう、そしてそれが私たち鍬神が顕現する理由に関係している」

梶の声に反応してか、全身黒一色で塗りつぶされた異形の怪物が非生物じみた動きでこちらに振り向く。

良く見ると怪物の身体はどこどころがざわざわと蠢いており、

本能的な恐怖と嫌悪感が腹の底から沸いてきた。

対して柵は変わらず毅然な態度で仁王立ちを決め込んでいる。

「 霊力とは生きとし生けるもの全てが微力ながら持っているもの、それ自体は持つていてもなんら影響はないが、生物が地に還る時それは土地に還元され、蓄積される。

……しかし一方で生ける者達は他にも？負？というものを吐き出している、それは持ち主の体から常に放出されており、霊力と同じく土地に蓄積する。

霊力は負を浄化し、無害化するものだが……もしも負が過剰に土地に溜まり、霊力による処理が追いつかなくなると様々な悪影響が生じる。

だから私たち鍬神は数百年に一度、負が霊力の許容量を超えた時霊力と素体を元に顕現し、同時に負も素体に憑りつき顕現、それから始まる鍬神たちによる負の一斉駆除 　これが祭だ」

「と、いうことは……!？」

「そう、ヤツこそが負の塊？雑蟲？だ」

雑蟲。

柵にそう呼ばれた異形の怪物は、全身をざわざわと蠢かせながらこちらへ一歩踏み出す。

その生気のない歩みは昔テレビで見たホラー映画に出てくるゾンビを彷彿させた。

「ヤツの素体は縞蚊のようだから……捕まれば血を一滴残らず吸い尽くされてしまうだろう、人間、決して邪魔をするなよ」

柵は今まで見たことも無いくらい真剣な眼差しで言う。

その言葉は俺を気遣っている、というよりも？勝負の邪魔をするな？という意味合いの方が強いのだろう。

だが、あんな怪物に対抗する手段なんて

「黒金剛！」

柵がそう叫び、荒れ果てた地面に掌をかざす。

するといつか見たように地面が輝きを放ち始め、そこから一本の黒い大剣が現れたのだ。

……ああ、そう言えばアイツにはアレがあっただんだけ。

「この程度の雑蟲にわざわざ時間をかける意味もない、すぐに仕留めてくれよう」

柵はそう言って空中の大剣を掴みとり、直後大地を蹴って走り出す。

全身を甲冑で纏い、加えてあの超重量の鉄塊を持って尚、その速さは人間の比ではない。

雑蟲はだらんと垂れた腕を勢いよく鞭のように振って迎撃を試みるが……遅すぎる。

柵はその腕を最小限の動きで躲し、あっという間に異形の怪物、雑蟲との距離を詰め、懐に潜り込む。

そして息をつく間もなく、雑蟲が反応する暇すら与えない音速の切り上げ。

それは風を切り裂き、いとも容易く雑蟲の肩から上を吹き飛ばした。

「おお！」

思わず歓声を上げてしまっ、が、柵の猛攻はまだ終わらない。

肩から上が霧散してバランスを崩す雑蟲に対し、柵は駄目押しと言わんばかりの前蹴り。

それをマトモに受けた雑蟲はバランスを崩し勢いよく転倒、背中を地面に打ち付ける。

……しかし信じられないことに雑蟲は未だ活動を停止してはいない、肩から上が無くなったその状態でも体勢を立て直そうと蠢いていた。

「……やはり縞蚊ごときではこの程度が限界だな、これで終わりだ」

なんとか起き上がろうと手足に当たる部分を動かす雑蟲を見下し、柵は二、三步後退。

そして雑蟲を真つ直ぐと見据え、剣を握る手に力を込め何かの構えを取った。

「本来このスタッグは対敵神用なのだが……大サービスだよ！ 人間よ、しかとその目に焼き付けるがいい！」

スタッグ……？

そう疑問を投げかける間もなく、ソレは始まった。

辺りを包み込む、異様な空気。

大地は震え、やがてその震えは大気をも揺らし始める。

しかし変化はそれだけではなかった。

柵の持った黒い大剣が見る見るうちに黒ずんでいき、大剣から金属質な光沢が失せていく。

そしてそれに同調するように、柵の右頬に何かの紋様のような物が浮かび上がったのだ。

「なっ……何を……!？」

世界の震えを体で感じながら、なんとか倒れないよう堪える。だが、そんな俺を嘲笑うかのように最後の变化が始まった。

立ち並ぶ街灯や民家から漏れ出る明かり、更には星の光さえもが次々と消失していく。

いや違う、櫛の持つ剣に光を？喰われて？いるのだ

「この時代はやたらと光が多いな、悔しいが……好都合だ、いくぞ！」

櫛が手に持った大剣を天高く掲げる。

光を十分に吸った櫛の剣からは先ほどの黒ずみが消え、代わりに眩い光を纏っていた。

櫛はその剣を握る手に更に力を込め、大きく振りかぶり

「金剛大車輪！」

覇気の込められたその言葉に続き、櫛の手から光を帯びた大剣が目で追えないほどの速度で投げ放たれる。

更に投げ放たれた大剣には凄まじい回転が加えられており、遠目からでは文字通り車輪のように見えてしまうほどだ。

そんな物体が空気を荒々しくかき混ぜながら地面を削り取り、凄まじい音と光を発しながら進んでいく。

そしてその剣は今にも起き上がろうとする雑蟲に迫り 命中。

同時に大剣が吸い取った光は雑蟲の体に触れた瞬間全て放出され、雑蟲は激しい光とともに消滅してしまった。

「大方、こんなものか」

櫛はそう言って一つ息を吐き出し、臨戦態勢を解く。

同時に光を全て放出し元の金属質な光沢を取り戻した櫛の剣は、

空中で光になって消えていった。

あまりの展開の速さに理解が追いつかないが……これだけは分かった。

柵は、あの異形の怪物を、こつも簡単に倒してしまったのだ。

「すげえ……」

そんな光景を目の当たりにして、余りの凄まじさに俺は再び感嘆の声を漏らしてしまう。

俺はそのまま視点を毅然と立ち尽くす柵に向ける。

こんなものを見せられては信じないわけにはいかない、コイツは本当に

ぐう

そんな事を思い始めた矢先、間の抜けた音がこのただっ広い空に響き渡る。

すると例によって黒い甲冑を纏った自称神様は糸が切れたかのようにならぬうちにその場に倒れ込んでしまった。

「……認めたくないなあ」

鎧越しに腹部を押さえ悶える柵を見て俺は切実にそう思った。

第五話「有難く思え」

再び自宅。

時計の針はすでに夜の8時を回り、外はすっかり闇に包まれてしまっている。

いつも通りなら、俺は今頃近所のスーパーで買った出来合いの惣菜をおかずにご飯を口に運んでいるところだが……やはり例によって今日は勝手が違った。

端から見ればシュールな光景だろう、何故なら俺は今、フレンチトーストを貪る鎧の少女にテーブルを挟んで向かい合って椅子に腰かけているのだから。

「つまりお前は土地に溜まった悪いものの塊をやっつける神様……と？」

「うむ、粗方そんな感じだな」

テーブルを挟んで俺の向かい側に座った黒い鎧の少女、柵は非常に幸せそうな表情でフレンチトーストを頬張りながら肯定した。

一応説明しておく、俺はあの後再び空腹で倒れしまった柵を死にも狂いで家まで運び、今は丁度さっきの余りのフレンチトーストを食べさせながら色々話を聞いているところだ。

フレンチトーストは作ってから大分時間が経過したこともあり若干冷めてはいるが、目の前で大事そうにちびちびとフレンチトーストを齧る柵の姿を見る限り本人は満足らしい。

「まあ人間の考える？神？とは少し違いかもしれんな、私の体は素体を元にほとんどが霊力で形成されている。そのような神秘的な存

在であるからこそ私たち鍬神が神と呼ばれる所以なのだ」

目の前で嬉しそうにフレンチトーストを食う少女を神秘と呼んでいいのかどうかは甚だ疑問である。

にわかには信じがたいが……この少女、神様なのだそうだ。

「ほれにひてもこの？ふれんちとーすと？というものは美味だな、果実とは違ったまるやかな甘さがある」

梶は丁寧にコメントまで添え、恍惚に満ちた表情でフレンチトーストを賞味する。

とりあえず食うか喋るかどちらかにしてほしいものだ。

「なにせ顕現してからの五日間口クなものをお口にしていなかったからな、果実一つ食べても空腹は満たされぬし樹液は腹の足しにもならなかった、この体もそれはそれで不慣れた物だ」

「……樹液？」

「ああ私の素体の主食だ、……が、正直いくら舐めようと腹が減る一方だな、早々に諦めた」

樹液、舐めたのかよ……

鎧姿の少女が木から滲み出る樹液を舐め取る場面を想像し、そのシニールさにすぐにその妄想を掻き消す。

なんか色々と危ない奴だな、コイツ。

……と、そんなことはどうでもいい、それよりもまだ聞きたいことはあるのだ。

「そういえばその素体って言うのは何だ？ さっきは鍬神の骨組み

って聞いたけど……」

「簡単に言うなら依り代のようなものだな、鋏神ならばクワガタ、雑蟲ならばクワガタ以外の昆虫……」

そこに土地から解放された靈力や負が集中し、一個の神としての地に顕現する。……ちなみにさっきのは多数匹の縞蚊に負が宿り雑蟲として顕現した物だ」

「成る程……」

「それと鋏神と雑蟲の強さは素体となる昆虫の強さと知名度に比例する。」

素体となった昆虫が強く有名ならばその分だけ強大な神となり、逆に脆弱無名な素体ならばその分だけ弱くなる……理解できたか？」

「……ってことは柵にも素体になった昆虫、いや、鋏神だからクワガタか……それがあるのか？」

それを言った直後の事だった。

柵は唐突に口を動かすのを止め、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべ始めたのは。

「くくくっ……やはりそれを聞いてしまうか」

まるで嘲笑うかのような含み笑い。

かと思うと今度は唐突にその場から立ち上がり、俺を見下しながら言った。

「よく聞くがいい人間！ 我が素体は……!!」

「オオクワガタだろ？」

「オオクツ……ええ!？」

途中まで言いかけた柵が先回りで答えを言われ、驚愕の声をあげる。

鳩に豆鉄砲、まさにそんな感じだ。

それからコンマ数秒の間を開け、柵ははっと我に返り、こちらを指で指して口を開いた。

「な……何故そう言い切れる！」

「まずお前の持つてる剣の名前の？黒金剛？、金剛はダイヤモンドの和名……つまり黒いダイヤ

これはオオクワガタの養殖方法がまだ確立されてなかった頃、そして同時にクワガタブームが波及し始めた頃、大型のオオクワガタの個体が高値で取引されてた頃に広まった俗称だ

ちなみに80mm越えの個体にもなると、たった1?の違いで値段が5倍にも10倍にもなり、83?の個体に至っては100万越え……まあ余計な事も喋ったけど大方こんな感じか」

「うっ、うっ……何でそこまで詳しいんだ……」

……女の子を泣かせてしまった。

「いやまあ……俺は子供の頃昆虫について色々調べてたりしたからな……」

で、でももし本当にその鍬神ってやつが骨組みになったクワガタの強さと有名さに比例するんだったらオオクワガタはかなり強い部類に入るな!」

ぐずぐすと泣きじゃくる柵を見ていたら妙な罪悪感にさらされてしまい、俺はすかさずフォローを入れる。
するとうってかわって柵の表情はぱあっと明るくなった。

「そうだろうそうだろう！ やつと分かったか人間！ 理解が遅すぎるぞはっはっは！」

テーブルから身を乗り出し、俺の頭をぽんぽんと叩きながら満面の笑みを浮かべる柵。

「（ウザいな……）」

高らかに笑い声を上げながらくしゃくしゃと髪を撫でる柵のハイテンションぶりについ心の中でそう漏らしてしまふ。
口に出さないのが俺流の優しさだ。

「……そういやさ」

「ん？」

柵はようやく頭を撫でる手を止め、俺の言葉に耳を傾ける。

「さっきお前は鍬神？ たち？ って言ったよな、ってことはもしかすると鍬神って他にもいるのか？」

「うむ、私の他に4人、計5人すでにこの地に顕現しているぞ、私が一番乗りだったかな」

そう言って得意げに胸を張る柵、さっきので余程気を良くしたの

かかなり上機嫌だ

「こんなのがあと4人もいるのか、すぐくめんどくさそうだな……
……ともかく、これで聞きたいことは大体聞き終わった。」

「そうかそうか、お前も大変だな、選別としてそのフレンチトーストは全部くれてやる、頑張れよ」

手をひらひらと振るジエスチャーを送り、いつもと比べれば若干遅めになった入浴の準備をしようと席を立つ。

そしてそのまま台所から出ていこうと引き戸に手をかけた。
その時だった

「……？ 何を言っている？ 私は今日からここに住むぞ？」

ぴたっ。

そんな擬音が聞こえてくる程見事に、俺の動きが凍る。

そしてしばらくの沈黙を挟み、俺は素早く振り返って声を張り上げた。

「ここに住む！！？」

「ああ」

当然のことだ、と言わんばかりに柵は首を縦に振る。

むしろ、何故今更そんな事を聞くのだろうか？ くらいの勢いだ。

「いやいやいや！ お前が何を言っている！？」

当然のことながら俺も声を張り上げて反論。

しかし柵は何故か上から目線で口を開いた。

「癩だが人間に命を助けられたのは事実、ならばそれ相応の礼をしなければ私の気が済まん

……と、いうわけで私がしばらくボディガードをしてやろう、有難く思え」

何故か上から視線でそう言つと、柵は再び残ったフレンチトーストを口に運び始める。

「……っ!？」

反論の言葉が喉まで出かける……が、どうしてもコイツのいいように言いくるめられるヴィジョンしか浮かばない。

……なので、俺はがっくりと肩を落とし、その日一日の疲労を全て濃縮したような溜息を吐き出し……

「もう勝手にしろ……」

最後にそう言い残し、俺は延々とフレンチトーストを貪る鎧の少女に背を向けた。

第五話「有難く思え」(後書き)

説明回おわるりれれ

第六話「図に乗るなよ人間」

「……疲れた」

2階の自室、俺はベッドに腰を掛けながら溜息と一緒にそんな脱力した言葉を吐き出す。

何の気なしに壁に掛けられた日めくりカレンダーに目をやると、カレンダーの日付は7月31日水曜日の表記になっていた。

俺は毎朝このカレンダーをめくるのを欠かさない。

何分俺は几帳面なのだ、今朝も高校へ行く前に間違いなくめくった記憶がある。

だからこの7月31日の日付は絶対だ。

7月31日、これだけ聞けばほとんどの人間がピンとくるだろう。そう、今日は夏休み前日、つまり明日から一か月間ずっと夏休みで家にいることになる。

両親はオーストラリアへ旅行に行っており、おそらく夏休みが終わるまでは帰ってこないだろう。

よって必然的にこの家にいるのは俺だけ、ということになるはずなのだが……

「人間、私はここで寝るぞ」

唐突に、背後から女性の声で慣れない呼ばれ方をされ、内心溜息をつきながら振り返ってみる。

するとそこには押入れの中で積み上げられた布団の上に胡坐をかいた少女の姿が……

「……猫型ロボット？」

「……？ 何を言ってるのか分からないが……」

そう言っつて押入れの中をもそもそと探り始める鎧の少女。

彼女こそが俺の悩みの種、加え今日から俺の家に半ば強引に居候となつた神様の 柵だ。

「鍬神も雑蟲も素体の特性を受け継ぐと言う点では同じだ、それは私とて例外ではない……」ということでは私は狭いところの方が落ち着くのだ」

「別にいいけど鎧の角で布団切つたりするなよ……」

「そして私は夜行性なのでまだ眠くない」

「知らんがな」

我ながら冷静かつ的確なツツコミだと自負する、が、やはりそんなことは押入れの中からこちらを覗き込む鎧の少女にとっては関係ない事らしく、何事も無かつたかのように押入れの奥へと引つ込んでもそもそと探索を再開し始めた。

「……んじゃ、俺は晩飯食ってくるからな、なんでもいいから物を壊したり傷つけたりするのだけはやめてくれよ」

「案ずるな、……つて晩飯？ ……フレンチトーストか!？」

「……もしかしてお前人間の食い物がフレンチトーストだけだと勘違いしてないか」

「なんだ……違うのか、つまりぬ」

櫛は残念そうに肩を落とす、再び押入れの奥へと消える。いくら無宗教とはいえこれが神様だとは信じたくないな……しみじみとそう感じると俺は押入れの中を漁る櫛を背に自分の部屋を出て階段を下る。

「確か惣菜の残りがあったよな、あとは納豆も少し……明日は買い出しに行くか」

顎に手を当ててぶつぶつと独り言を呟きつつ、台所へと向かう。と、その時不意に玄関の呼び鈴が鳴らされ、俺は途中で足を止めた。

壁に掛けられた時計に目をやる、短針はすでに8時を回っていた。

「……こんな時間に誰だ？」

近所のおばさん……は考えにくい、なら大方セールスか何かの類なのだろう。

俺は一旦踵を返して玄関でサンダルを履き、ドアを開ける。しかしドアの向こう側、そこに立っていたのは予想していたどれでもなく……一人の男性だった。

「よ、行雲」

そう言って男性はにこやかに挨拶をする。

お洒落とは言い難い乱雑に切り揃えられた茶髪混じりの頭髪、背は俺より少し小さい程度で170？ちよい、細身だがよく筋肉のついた体。

……俺はこの男を知っている。

「……圭介か」

男の名前は夏目 ナツメ 圭介 ケイスケ、俺とは同じ学校で同じクラス。
そして数少ない中学校の頃からの友人の一人だ。

「で、どうしてまたこんな時間に？」

「なんでも後延ばしにすると悪いじゃん？ だからほら、宿題の答え」

「いやまだ夏休み始まってすらねえよ」

「おう、勿論冗談だ」

「……とまあ、こんな感じのショートコントができるくらいには親友だ。」

しかしいくら親友とて、ただショートコントをするためだけにわざわざ家まで来たわけではないだろう。

「そ、ちよっと面白い話を聞いたから、お前にも教えておこうかと思ってるな」

「……わざわざ家に来なくても良くないか？」

「だってお前携帯持ってないし、家電の番号は忘れたし」

「あー……」

そういえばそうだった。

俺の高校では、ほぼ全校生徒と言っても過言ではないほどの人間が携帯を持っている。

しかし別に彼女がいるわけでもなく、大体の用事を家の電話で済ませてしまふ俺は携帯の必要性を見出せず、結局買わず仕舞いだっただ。

一年の頃は「高校生にもなつて携帯を持っていないのはお前だけだ」とよくネタにされたものである。

「まあそれは分かった、……で？　面白い話って？」

「おう、まずお前同じクラスの吉田って女子知ってるよな、最近欠席してた」

「吉田……ああ、あのギャルっぽい」

吉田楓

いつも鏡を見ていて、クラスのチャラそうな男子とよく談笑をしているある意味活発な女子。

圭介と同じく同級生ではあるが直接喋ったことはない、というか接点がまるでない。

別段軽い訳でもなく、かといってオタクなグループに入ってる訳でもない俺や圭介とは住んでる世界が違う、そんな感じ。

それゆえに何故あの女子の名前が圭介の口から出てきたのかが不思議だ。

「吉田な……入院してたんだってよ」

「……さすがにただ人の不幸を笑えるほど下衆ではねえよ」

「違う違う！　そんな目で見んな！」

圭介は両手をぶんぶんと振って否定する。

「……じゃあ何だ？ 一応聞いてやる」

「実はな、吉田最近不審者に襲われたらしいんだよ」

「襲われた……？」

「……なんだその話、聞いたこと無いぞ。

確かに俺は噂に疎い、いつもそうだった類の噂は耳の早い圭介経由から俺の耳へと入ってくる。

しかし吉田が学校に来なくなったのは三日ほど前から、ウチの学校の生徒……ましてや同級生が誰かに襲われたというならとつくにクラス中に広まっているはずだ。

学校側としても注意を促したりとか色々あるだろう、……しかしそんな素振りも無い。

「……さすがにデマだろそれ」

「いやいやいやマジだぜマジ、なんでも3日前の日曜日いつもつるんでる男たちと一緒に遊びに行つてその帰りに襲われたらしい」

ちなみにこの情報ソースは翌日になって学校側から事情聴取を受けた……要するに日曜日に吉田と一緒にいた男どもからだ、ついでに吉田が入院してるのもう確定らしいしな」

「事情聴取なあ、それならマジっぽいけど……でも不審者なんてそれほど騒ぎ立てることでもないだろ？」

「おいおい一人入院してんだぞ？ それはさすがに騒ぎ立てるだろ、

それに……おかしいのはここからだ」

圭介はそう言って指を一本立て、顔を近づけてくる。
そして潜めた声で言った。

「吉田さ……その不審者に変な薬なんか打たれたみたいなんだよな……」

「薬……！？」

薬とは……なにやら不穏な話だ。

毒か？ それともやっぱり注射器に込めて打つと頭がアレになるアレの事だろうか……？

「いやいや、そういうのじゃないんだよ」

「じゃ、じゃあ何だ……？」

「それがよく分かってないらしいぞ、……っっていうかそもそも本当に不審者に会ったのかも何されたのかも分かってないんだよ」

「……は？」

……どういうことだ？

「まあ聞けよ、事の発端は三日前、7月28日の日曜日時間は夕方
の6時頃、辺りに突然女の悲鳴が鳴り響き、それを聞いた近隣住民
たちがすぐさま家を飛び出して駆けつけると……なんと路上で腕か
ら血を流して倒れてる吉田を見つけたそうだ」

「血……！？ それはマズインじゃ……！」

「いやいや出血の量は本当に微量だったんだそうだ、鋭い凶器で少し切れ込みを入れられた程度……ただ痛み方が尋常じゃなかったんだとよ、何回呼びかけても腕を抑えながら悲鳴を上げるだけで拳銃失神したらしい」

「そんなことが……、じゃあ吉田はその、犯人とか見てなかったのか？」

「それも分からないんだってさ」

「分からない……？」

「そ、吉田は気絶した後病院に運ばれたんだけどな、なんでも目を覚ますたびに一心不乱に腕を掻き毟ろうとして何かを聞き出す余裕もないんだと、麻酔とか色々使って今は落ち着いてるらしいけどそれでも話せる状態ではないっぽいな

……まあ俺が知ってるのはこれくらいだ、犯人も捕まってるみたいだし一応教えておこうと思ってな」

「……それはあんまり面白くない話だな」

「一応気を付けとけて事だ、……ま、お前には無縁だとは思いつけどな」

「それはもつともだ」

大体そういう不審者と言うのは自分より弱いと確信できる相手、つまり女子供を狙うと相場が決まっているものだ。

勿論俺は女でもないし、もう高校生にもなつて大分体つきもしっかりしてきている。

加えて父親の身長をすっかり遺伝してくれたおかげで身長は175?前後と平均より高い。

今は部活こそ入っていないものの、その手の変態に襲われる事はないだろう。

そしてそれは圭介も同様で、身長はそれほどでもないが中学校の頃柔道部の主将をやっていたのだ。

体つきも良いし、万が一不意を突かれて襲われたとしても不審者相手に一本決めるくらいいけないだろう。

つまるところ……

「……結局面白半分でそれを俺に話をしに来ただけなんだろう？」

「そうゆうこと、じゃ俺は晩飯があるんでこのへんでシーユーアゲイン」

「分かったよ、じゃあな」

圭介は最後にそれだけ言ってやけにスッキリした表情で足取り軽く立ち去っていき、それを確認した俺はドアを閉める。

さて……変なところで時間を食ってしまったが早く夕食の準備をしなければ……

「ふむ、幸先がいいな」

「おあ!!?」

唐突に背後から聞こえてきた声に俺は悲鳴にも似た情けない声をあげてしまう。

早鐘を鳴らす心臓を抑えながら後ろに振り返ってみると、そこには逆さまになった黒い鎧の少女。

正確には天井にぶら下がってこちらを見つめる櫛の姿があった。

「突拍子もなくそういう人間離れした事をするな！ 危うく色々な臓器口からリバーするところだったぞ！」

「ふっ、輪が素体であるクワガタの強靱な脚力があればこの程度の事は朝飯前だ、……しかしそんなことはどうでもいい、それよりさっきの人間がした話は覚えているな人間」

……人間で一纏めにしてしまうからややこしいな、いい加減名前前で呼んでくれればいいのに。

「……不審者の話だろ、それがどうかしたか？」

「不審者……か、ならばその人間は相当手際が良いヤツなのだな」

櫛はそう言ってニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

まるで見下す……いや、見上げるような笑みだ。

「……どういう意味だよ」

その言い方に大人げなくも少しばかりかちんときてしまった俺は、少々不愛想にそう返す。

すると櫛はふっ、と口元を僅かに歪め語り出した。

「愚鈍め、襲われた人間の悲鳴を聞きつけすぐさま駆けつけた人間たちがそれを発見した、……その犯人はよく他の人間に見つからずに逃げられたな」

「あ……」

柵に言われて初めて気付く明らかな異常。

圭介は言っていた、吉田の悲鳴が聞こえた後すぐに近隣住民が駆けつけた、と。

なら柵の言うとおり一人くらい犯人の姿を目撃していても……否、一人も見えていない方がおかしいのだ。

にも関わらず、圭介の話によると犯人についての情報は一切無いという。

「ついでに言う可悲鳴は襲われた時にあげるものではない、それより前にあげるものなのだ

……まさか明らかに敵意を持った人間が自分に近づいてくるのに気付かないほど人間は鈍感な生き物ではあるまい？」

「言われてみれば……」

「加えてその犯人とやらは人間の腕に鋭利な凶器で細かい傷をつけ、そこに毒薬の類を流し込んだようだな

そこまで繊細な作業を抵抗する人間に対してやってのけ、尚且つ悲鳴を聞きつけた人間どもがやって来る前に逃亡……文字通り人間離れした奴だな、是非一度手合せしてみたいものだ」

「……何が言いたいんだよ」

果てしなく皮肉っぽいその言い方に、俺は思わず不機嫌な声を漏らしてしまう。

すると柵は天井にぶら下がって逆さまになったまま、鼻で笑って告げた。

「決まっているだろう、そいつは犯？人？ではないということだ……十中八九、雑蟲の仕業だろうな」

「な……！？ 雑蟲って人を襲うのか！？」

思わず声をあげて驚いてしまった俺に対し、柵は憐みを込めたような視線で口を開く。

「……貴様は馬鹿か？ 蜂に百足に蜘蛛にダニ、それに数刻前に会った縞蚊でさえ、それぞれ理由は違えど人間を襲うだろうが、力量差がありすぎて気付かないだけだ。」

「……もつとも、負を溜めこんで雑蟲となった奴らと貴様ら人間の力量差は逆転しているがな」

「でもだからといって必ずしも雑蟲と違ってヤツの仕業とは……！」

「襲われた人間の症状からその雑蟲の素体に心当たりがある、いい加減認めろ」

柵はもう話すことなどないと言った様子でぐるりと踵を返し、天井にぶら下がったまま向きを変える。

再び俺の家の中を探索するつもりなのだろう、俺はそのまま段々と遠ざかっていく柵の背中を見つめながら思い切って口を開いた。

「なあ、雑蟲って人間にも倒せ」

そこまで言いかけてから不意に俺の両頬に冷たい何かが触れ、言葉が遮られる。

俺の口を塞いでいたのは黒く金属質な籠手、先程までここから離

れた場所に立っていたにも関わらず、いつの間にか目前まで接近してきていた柵の手によって俺の口は強引に塞がれてしまったのだ。

「図に乗るなよ人間……」

「!?!」

突然の出来事、浴びせられる柵の無感情な一言。

その二つが合わさって俺の頭はたちまち混乱してしまう。

そして柵はそんな俺を真っ直ぐと冷たい視線で見据えて、言った。

「……貴様のさっきの発言にどんな意図があったか当ててやるうか、自分は雑蟲の存在を知る数少ない人間だ、ならそれ以上犠牲が出る前に雑蟲は自分で倒してしまおう……そうだろう?」

「……!?!」

「当たっていたようだな……いいか、教えてやる。」

そもそも雑蟲など本来人間がどうにかできるものではないのだ、今日の縞蚊も雑蟲としては最低ランクなのだぞ、あれより強い雑蟲なぞごまんといる。

……更に人間にはいくら雑蟲を傷つけることが出来ても倒すことは決してできない、雑蟲を倒すには靈力で浄化しなくてはならんからだ。

人間の持つ微力な靈力では雑蟲一匹浄化できん、そもそも人間には体内の靈力を扱う術を持たないのだ……これで理解できたか?」

俺はようやく柵の手から解放され脱力する。

「明日は私一人でその雑蟲を駆除しに行く、行き先も時間も雑

虫の素体も貴様には一切教えない、それでも自らが雑蟲を倒したい
というならば……自分で見つけるがいい」

最後にそう言うと、柵は今度こそ本当にその場から去って行った。
呆然とその場に立ち尽くす俺を残して

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5511z/>

クワガ・スタッグ！

2011年12月31日00時52分発行